

表紙によせて

ノハナショウブ *Iris ensata* var. *spontanea*

(Makino) Nakai

ノハナショウブは日本、朝鮮半島、中国東北部、シベリア東部まで広く分布する多年草で、特に日本では北海道から鹿児島まで各地に自生が見られる。葉は平たく剣状で、中肋が隆起する。花茎は直立し、高さが60～120cm。頂部に直径約10cmの花をつける。花は3個の外花被片が下垂し、アヤメ科の特徴的な花形となる。花の色は自生の地域によって紅紫色から青紫色まで変化が見られる。また、希に桃色や白色のものも現われる。

このように日本各地に自生するノハナショウブであるが、それと確認できる名前は万葉集や平安時代の和歌集には見られない。万葉集に菖蒲（あやめ）あるいは菖蒲草（あやめぐさ）の名で歌われる植物が登場するが、これはノハナショウブではなくサトイモ科のショウブ（菖蒲）である。葉の香りが邪気を払うと信じられたショウブは中国から伝わった端午の節句（5月5日）と関わって奈良時代には重用されていた。ノハナショウブが最初に記録されるのは14世紀に編纂された「拾玉集」で、花菖蒲（はなあやめ）の名前が出てくる。見るべき花をつけないショウブに対して、草姿が似ていて美しい花をつけることからその名が付けられた。旧暦の5月5日は太陽暦の6月にあたり、その時期に花を咲かせるノハナショウブは江戸時代になるとショウブと同様に端午の節句を飾る植物として用いられるようになった。なお、万葉集や古今集で歌われる「ハナカツミ（花勝見）」をノハナショウブと考える説もある。

さて、ノハナショウブを親として変化に富んだ色や花形をもつノハナショウブが園芸植物として作り出されたのは江戸時代の後期である。松平左金吾定朝（1772-1856）は、まだ改良の進んでいないノハナショウブに近い個体群に花の色や形に変化があることに着目し、交配を繰り返して3個の大形の花被片（三英咲き）から6個（六英咲き）、さらに八重など多くの花形を作り出した。また、花色も絞り、覆輪などが加わって多彩になり、大きさも直径が30cmまでにもなった。それらはその後、江戸系に発展していく。また、肥後藩では藩主が左金吾から株を譲り受けて花と草姿の整った独自の系統を作り出し、肥後系と呼ばれている。同じ頃、伊勢松坂の吉井定五郎（1776-1859）はノハナショウブを交配親に加えて、3個の外花被が大きく垂れ下がる伊勢系とよばれる系統を作り出した。ノハナショウブの面影を現在に伝える長井古種は1962年に山形県長井市で発見された。海外でも米国を中心に交配が進められ、これまでの日本にはなかった色、形、大きさのものが生まれている。ノハナショウブ一種から始まったノハナショウブは、今では国際的な園芸植物になってきている。

（西村悟郎）